

伝統的都市緑地の半公共的機能と都市化におけるその変容

——インドネシア・バリ島のテラジャカンについての社会生態学的研究——

○近畿大学 菱山宏輔

岡山大学 加藤禎久

1 目的

本報告の目的は、インドネシア共和国バリ州（以下バリ島と略記）において南部都市の伝統的な家屋敷に沿って存在するテラジャカンと呼ばれる緑地を対象に、その緑地が持っていた半公共的機能を明らかにするとともに、近年のデンパサール市の都市化にともなってそれらが著しく変容している状況について明らかにすることである。

2 方法

フィールドとして二箇所を選定した。一つ目はプンリプランと呼ばれる、伝統的な家屋敷の街並みそのまま保存され、ガイドブックにのるまでに観光地化している地区である。当初、先行研究においては持続的な農村開発の出発地点として位置づけられたプンリプランにおいて、テラジャカンがどのように変化しているのかを、インタビューおよび実際の植生についての調査によって明らかにした。二つ目の事例は、デンパサール市郊外C地区である。政府から多くの援助をもらい、清掃や蚊の撲滅の活動において多くの賞を獲得している地区であり、自然環境保護に親和性があると想定された。ここにおいてテラジャカンがどのように保たれて、あるいは変化しているのかについてインタビューと植生調査により明らかにした。

3 結果

プンリプランにおいては、観光客のための美化が過剰にすすみ、従来ローカルには存在しなかった植生が多く見られた。同時に、水路のメンテナンス性のためから、一部をコンクリート化することによってさらにテラジャカンがコンクリートで固定化されるという制御方法がみられた。さらに、テラジャカンの公共性よりも、美化によって観光客を呼び込もうとする外来者からの寄付等によっても方向付けられはじめていることがあきらかとなった。

デンパサール市郊外C地区では、清掃や蚊の撲滅にあわせた植生へと変化するとともに、政府がコミュニティ・ディベロップメントの一環として特定の植物を無料で配布する等がみられた。これにより、テラジャカンの多くは商品経済に適合的な植生に変化し、住民意識もまたそれをよしとする方向性ももちあわせていた。ただし、小規模ながら都市農園栽培の女性グループが独自の活動を行うなど、新たな方向性も見いだすことができた。

4 結論

全体としてテラジャカンはかつての公共性を失い、家屋敷の面積を確保するために削られるか、商品作物が栽培される場所に变化していた。現在、一部の識者からは、州レベルでの競争の必要が謳われている。というのも、ニュピというヒンドゥー教の新年の際にかつぎだされるオゴオゴや、宗教的祭礼のときに道沿いに飾られるペンジョールという竹製の飾りの復興に、競争が大きな役割を果たしてきたからである。ただし、それとひきかえに順位の優劣が決まり、流行り廃りが生じたり、形式の固定化が生じたりといった、文化への新たな影響が問題となっている。テラジャカンもまた同じ道をたどるのか、それとも、オゴオゴやペンジョールにはない半公共的な要素を残し得るのかについて、今後のいっそうの調査研究が必要となるところである。